

特集：政治の行方 2008

パラグアイ・61年ぶりの政権交代

田中 裕一

1. 1993年に新憲法下で初選挙

1954年にクーデターで政権を掌握したアルフレド・ストロエスネル陸軍司令官は国民共和協会（通称：コロラド党もしくは赤党）と軍を2本の柱として35年にもわたり独裁的な政治を行っていたが、1989年、軍部の中枢に居て腹心として知られていたアンドレス・ロドリゲス将軍はストロエスネル大統領に対してクーデターを行い政権を奪取し大統領に就任し、ストロエスネル大統領はブラジルに亡命した。1992年に憲法改正が行われ、大統領の任期はストロエスネル長期政権の反省から一期5年とされ再選は認められない事また上位者による決選投票は無く、一回の選挙で一番多く得票を得た者が大統領に就任する事等が盛り込まれた。この新憲法下で初めての選挙は1993年に行われ、ロドリゲス大統領の強い支持の下、事業家で与党赤党候補のファン・カルロス・ワスモシ氏が当選し、39年ぶりの文民大統領が誕生となった。ワスモシ政権時代、金融危機等から反政府の動きが活発となり、不安定な状況となり1996年にリノ・オビエド氏がクーデターを計画したようだが、色々な事情、外国からの圧力で実行せずに断念したとされている。

1998年の大統領選挙に向けて赤党の党内候補争いで軍出身の1996年にクーデター未遂事件を起こしたとされるリノ・オビエド氏と党幹部のルイス・アルガーニャ氏が激しく

争った。1997年9月に行われた党内選挙でオビエド氏が赤党の大統領候補とされたが、不透明な部分も多いとされ、アルガーニャ候補の陣営からは選挙結果に対して強い抗議があり、両者の激しい対立の中、1998年3月に2年前にオビエド氏が画策したとされるクーデター未遂事件に有罪の判決が下り、10年の禁固刑とのことで、身柄は拘束され大統領候補から外された。ただ、赤党は党内選挙でのオビエド氏の勝利は認め、オビエド氏の副大統領候補であった実業家のラウル・クーバス氏を大統領候補に繰り上げ、次点の大統領候補であったアルガーニャ氏を副大統領候補とし、1998年5月の選挙では赤党は挙党体制のクーバス（大統領候補）・アルガーニャ（副大統領候補）のコンビとなった。ただ、クーバス陣営では「オビエドに自由を」というスローガンを用いるなどアルガーニャ派との確執は続き、赤党内部での火種を残しながらの選挙戦だった。それでも真正急進自由党（通称青党）を中心とする野党連合（ライノ大統領候補 - フィリソーラ副大統領候補）に対して10%近い差を付けて勝利し、クーバス氏が大統領に就任した。

2. 99年には副大統領暗殺

1998年8月15日に就任したクーバス大統領は4日後の8月19日に特赦令を出しオビエド氏の拘束を解いた。アルガーニャ派な

どはこれに反対し党内の抗争は一段と激しくなり野党からもオビエド氏特赦に対して強い抗議の姿勢が示され、クーバス大統領への批判は増大し国会は空転、翌年1999年3月にアルガーニャ副大統領暗殺にまで発展した。国会ではクーバス大統領への弾劾決議が審議され、抗議からバスなどは無期限ストに入り国会前には多くの市民が大統領への抗議に集まるなど市民生活にも大きな影響が出た。これに対してクーバス大統領は国会前で抗議に集まっていた群衆に対して力で対抗し、軍を投入し戦車まで繰り出し騒然とした状態となり死者5人、負傷者は40人を出す惨事となり、クーバス大統領に対する批判は強まり、ついにクーバス氏はブラジルに亡命し、この時点で正副大統領が不在という異常事態となつた。

憲法に拠ると正副大統領が不在となった場合には上院議長が昇格する規定になっており、上院議長であったルイス・アンヘル・コンサレス・マキ氏が大統領に就任、アルガーニャ派が与党赤党の実権を握り、非常事態ということで、野党有力者も協力する姿勢を示し入閣し举国一致連立政権が誕生した。また、2000年6月には拘束を免れてブラジルで潜伏していたオビエド氏はブラジル政府によって身柄を拘束された。

副大統領不在の為、憲法の規定により2000年8月に副大統領選挙が実施され、赤党からは故アルガーニャ氏の子息であるフェリックス・カルロス・アルガーニャ氏が弔い合戦という意味を込めて候補者となり、青党からはフリオ・セサール・フランコ（通称：ジョジット）氏が候補者となり選挙が行われた。赤党は副大統領選挙であり、またオビエド派の造反、油断もあり、結果は僅差で野党・青党のフリオ・セサール・フランコ氏の勝利となつた。これにより大統領は与党赤党の所

属で選挙を経ずに昇格したゴンサレス・マキ氏、副大統領は選挙で選ばれた野党青党のフリオ・セサール・フランコ氏という非常に変則的な政権となり、一致した政策を打ち出せない状況に陥つた。オビエド・シンパによる抗議行動、政府への不信、ゴンサレス・マキ大統領の不用意な行動・発言から混乱し、政治的には非常に不安定になり、青党など野党側から再三大統領に対して辞任要求が出されたが、赤党はゴンサレス・マキ大統領が罷免されると副大統領のフリオ・セサール・フランコ氏が大統領に昇格してしまう事になるので、とにかくゴンサレス・マキ大統領を支えた。

3. 03年大統領選では赤党が勝利

2003年の大統領選挙に向けては1998年の大統領選挙以来、政治的に不安定な状態が続いていたので、「リーダーシップの在る政策を打ち出せる大統領」が望まれていた。与党赤党の予備選挙は実業家のオズワルド・ドミングス氏と党幹部のニカノル・ドゥアルテ氏の争いとなった。ドミングス氏は人気サッカーチームである「オリンピア」の会長であり、南米クラブナンバー1を競うリベルタドーレス杯に優勝しトヨタカップに出場した手腕が高く評価されていた。世界一を決めるトヨタカップの対戦相手は当時世界最強とされていたレアル・マドリーで、もし仮にこの試合に勝利した場合は直後に行われる党内予備選挙でも勝利は間違いないと噂されていたが、試合の結果はオリンピアの惨敗で、この影響も大きく作用しニカノル・ドゥアルテ氏が赤党候補に選出された。青党からは現職の副大統領であるフリオ・セサール・フランコ氏が、これに実業家で新政党・祖国愛国党を設立したペドロ・ファドウル氏が名乗りを挙げ、三つ巴の選挙戦となつた。野党連合が成

立すれば勝てるという事で連立も模索されたが双方譲らず、結果は与党・赤党のニカノル・ドゥアルテ氏が37.1%の得票で勝利し大統領に就任した。

今回は独立系として元司教のフェルナンド・ルゴ氏が大統領候補として名乗りを上げ、南米ではブラジル・ルーラ、ベネズエラ・チャベス、エクアドル・コレア、ボリビア・モラレスと大衆主義の反米的な左翼的な大統領が続いて登場しており、注目を集めた。祖国愛国党は前回有力候補として僅差で3位となったペドロ・ファドゥル氏を今回も候補として擁立し、注目の青党はルゴ氏と選挙共闘を組み、ルゴ氏を大統領候補に擁立した。オビエド氏は2007年に公民権を回復し、赤党とは別の政党（ウナセ）を結党しており、大統領候補として名乗りを上げた。これに対して与党・赤党はドゥアルテ大統領が再選に意欲を燃やし憲法を改正しようと試みたが実現せず、腹心のブランカ・オベラル教育相を後継者に指名し、自身は後見役として政治の中核に残るとした。一方、刷新を訴えるルイス・カスティグリオーニ副大統領が出馬し、赤党内選挙はオベラル女史とカスティグリオーニ氏の争いとなった。党内選挙は混乱し数々の不正や不備が見つかり選挙区によっては再選挙も行われた。最終的には僅差でオベラル候補の勝利とされたが、不透明な点が多くカスティグリオーニ氏は納得せずこれを不満としオベラル候補の勝利を認めないまま大統領選挙戦に突入した。カスティグリオーニ氏がオベラル候補を支援するかどうかが注目されたが、投票前日には「他の候補者達は票を盗まれないよう気をつけろ、自分の支持者は一番悪くないと思う人に投票するように」と発言するなど、最後までオベラル候補を支援する姿勢を示さなかった。



(写真:野党連合・ルゴ候補と知事候補:カアグアス県)

4. 現実的な中道左派路線

結果は野党連合のルゴ候補が与党赤党のオベラル候補に10%の大差を付けて圧勝した。61年間続いた赤党政権はついに終止符を打つ事となった。ドゥアルテ政権は不人気のゴンサレス・マキ大統領の後にさっそうと登場し、多くの有能な人を登用し滑り出しは概ね好評だった。後半は独裁的な色彩が強くなり、自身の再選それが実現出来ないとなると院政を画策し、党内選挙ではなりふり構わずカスティグリオーニ前副大統領に対抗し自身の傀儡であるオベラル候補の勝利として、不正・腐敗の烙印を押される事になった。オベラル候補は候補者自身の資質を見られる事無く、ドゥアルテ大統領の分身と見なされ、選挙に際しても必ず不正を行うと見なされていた。信頼を失った候補は幾ら組織力があり、有権者の半数以上は赤党の党員と言っても勝利は難しいという事を感じた。党内選挙で争ったカスティグリオーニ氏は最後まで自身の勝利を奪われたとしてオベラル候補を支持しなかった事が大きく響いた。人気があるカスティグリオーニ氏を立ててドゥアルテ大統



(写真：赤党・ブランカ候補を支持する行進-02
：アスンシオン市)

領は一步下がって表に出ないようにしていれば赤党の圧勝だったのに悔しがる人も多く居た。ルゴの勝利について、多くの人は赤党の自滅と見ているようである。

赤党の敗因をまとめると：

01・ドゥアルテ大統領の信任選挙になってしまった。：赤党か否かではなく、現政権を信任するかどうかに話がすり替わってしまった。

02・党内で制御、チェック機能が働かず、内容を検討する事無くドゥアルテ大統領の意向に沿って動いていた。外から見ていると「独裁」と映った。

03・赤党候補が大統領になりたいのは國の為に働く為ではなく、個人の蓄財の為と思われてしまった。

04・オベラル候補がドゥアルテ大統領の分身、操り人形と見なされてしまった。

05・地方出身者の男臭い党というイメージに反した女性が候補者になり、支持者に戸惑いがあった。

06・オビエド、ルゴ二人の有力候補者と地盤である地方の票を取り合ってしまった。

07・オビエド氏の公民権を回復し大統領選挙に出馬させ、ルゴ候補と票を奪い合うシナリオであったが、同時に赤党の票も多くオビ

エド候補に流れてしまった。

08・党内予備選挙で不正があったと国民から見なされ、嘘つき・不正・腐敗のイメージが定着してしまった。

09・過去の選挙では同じ党であっても候補者は前政権との違いを明確にし「刷新」を訴えクリーンなイメージを持って選挙に臨んでいた。今回は現政権の継続かつダーティーなイメージになってしまった。

10・カスティグリオーニ氏との和解が成立せず、党内が分裂したままで戦った。

11・国民そして世界の目があり、不正な事は出来なかった。

12・最後は必ず赤党が勝つという慢心があり、油断があった。

13・世間、外の世界の常識では無い党内の事情が優先してしまった。

14・政権交代が何を意味し、どのような痛みを伴うものか党支持者が余り理解出来ておらずバラバラになり、ルゴ人気に対応出来なかった。

15・党の体質が古くなり時代に合わなくなっていた。選挙演説をとっても政策本位でなくスローガンを絶叫するばかりで若い人を引き付けられなかった。

また同時に行われた上下院議会選挙に関しては与党・赤党と野党青党が拮抗する結果となった。赤党の凋落傾向がはっきりしたと言える。

次期大統領は元司教という経験で独身、私欲が無く金銭には余り関心が無い事を強調している。選挙翌日に行われた勝利会見でもノーネクタイ、サンダル履きという従来のスタイルのままだった。8月15日の大統領就任以降においてもこのスタイルを続け、豪華な大統領公邸には住まず、現在住んでいる家に住み続けると表明している。なお、政権の要となる財務大臣にディオニシオ・ボルダ氏

上院		下院	
	改選前		改選後
赤党	18	15	43
青党	12	14	21
UNACE	5	9	5
祖国愛国党	7	4	9
PPS	2	1	1
その他	1	2	1
—	45	45	—
			80
			80

が指名された。ボルダ氏は2003年、現在のドゥアルテ政権発足当時の財務大臣で2005年まで務めた。赤党政権で活躍した人も有能であれば登用する事を示す狙いがあるようだ。政策として出ている項目は例えば官僚主義の撲滅、借款・無償の効率的運用など至って常識的な事ばかりで大きな政策の転換は無い事で内外の不安を取り除く意図があるよう見える。南米各地で大衆迎合的な左翼政権が誕生しているが、エバ・モラレス（ボリビア）ウゴ・チャベス（ベネズエラ）反米過激的な政権とは一線を画し、急激な変化を引き起こすような政策は取らずブラジルのルーラ

大統領のようなどちらかと言うと現実的な路線を取る中道左派政権と思われる。

なお、パラグアイの政党に関して赤党は党的シンボルカラーは赤だが、右翼的、保守的な政策、青党はリベラルな社会派的な政策で日本の政党で例えるならば自民党・赤党、民主党・青党に近いと考えられる。この他の野党には赤党から分かれたオビエドシンパの政党（ウナセ）、実業家・知識階層から支持を集めている祖国愛国党等がある。

（たなか・ゆういち 在パラグアイ商工会議所）



（写真：ルゴ次期大統領の自宅）